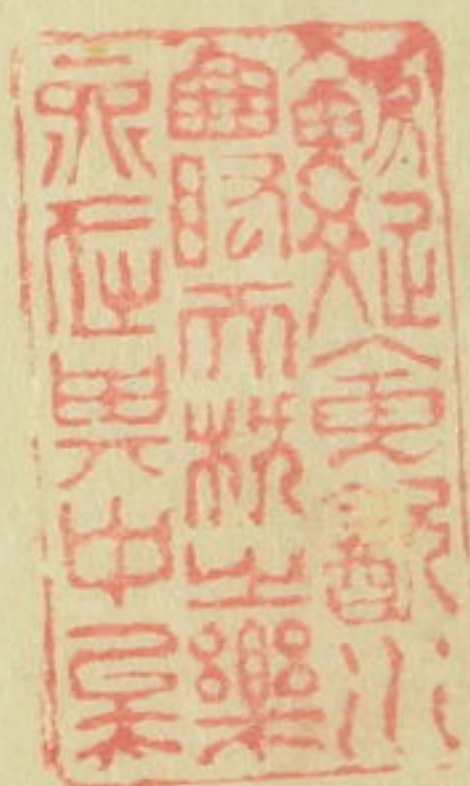




文化癸酉春



叩葉齋集

尾張

梅樹軒逸人



叩葉齋集

人目乃遊い盡さぬ

ものごとく人へ

此集を撰

梅樹軒逸人



深き森よりやききも雨柳枝垂

あうもい幸洲の遠く同舞 秋盤

人言に花のあはれきつ新きや 世帯

ちうとむらも柳の白ひや 記舎

此の足もとめある

柳か南 少年 乙酉

日か木の飾や花乃

芳野山 逸人

川柳多うとと

魚もあふ さし 乙酉

立月さき 乙酉 陸田

を能く春れ月

ちうとむらも 乙酉

柳か南 乙酉

あうもい 乙酉

くしれ 乙酉

そや蒼い 乙酉

吞舟

か柳の 乙酉

あきたうつる心

あきたうつる心

あきたうつる心



浪草

雪山 推夫 西



櫻山默豆
 歸瑠人毛
 南志逸人



此集即興時之吟

一日之刻句也了自蓮

夕化十雪叩込む蕭の目 逸人
 花をわけてまのねむさ 快臺
 海象もまね心をみ海り 也實
 望の石は書なりしより 危害
 特牛の跡跡まる月照きて 嵯康
 出れおてみ外まの上一瓶

卯葉集

海對千回

赤雲波童皇侍のにかけさせ
 名所とも時て嘆きし
 鞠袴 石段もききに名をいぬ
 奥道の流り 浮世をかき
 あるゆゑなる岩本の宮にたて
 月夜もむらに涼風う吹
 ところその能くをえくまう
 大字れきふのちや 花の根
 折風 土圍 臺 人 棟在 實 舍童 定

今日は連福の御孫小童皇飯
 櫓嘆とや鐘と撞らん
 足えのもまき初る時
 ちきりに酒のすむまき
 漱粉に漬られ極の浮沈
 かけあぐ 時の思ひ
 かけ極も子孫も神の使め
 草の造り 欠ひかちたる
 臺 凡 舟 舍 定 童 人 在

宇流依之登弓矢衣捨天九坊主 實
 日る所の筑波ゆきのありかの 童
 煙掃ハ我夢も寂るるをわわ 舟
 此琵琶島の人とみ聲 人
 所りりりあ知らるるをわわ 舍
 月明てより小冠者みあま 我
 花候了ら葡萄代もとわわ 是
 穂のちやにハま度り一たん 臺

あまの目もを隣起りり 童
 紐布の汚意を作さハ 舟
 見る所もなき面影の諸白髪 人
 や海を伝てはみ来 垣 臺
 折あふれくろふ足りり花 秋臺
 柳 臺 柳 集 友 室

雪をあらき後晴天のわらわが 快臺
夢の昔の裂る大啼 逸人
毛半竹をくち家建てて 也実
中にも氣の極き人一人 茫唐
閨山此く宵乃月ハ真丸ク 人
秋乃聲なり鉄樋に水 臺

さてむく下戸の酔さる酒 舎
牛乳走り夕暮れの時 実
とくたうやとあさむる時 臺
まき葉も葉の中のみとも 嵯康
とくたうやとあさむる時 秋臺
銅下の新や、はらうと 折凡
静さる所側町の夜は月 実
君やうたに還り編あ 丘実

まりくす古所の先子とていふて 標
 浅くくとはけり服え 臺
 旅人をものなりふ所終始 舎
 異國とてはけり樓の妻 是
 香に白く羅縵の神の懸る 凡
 預けられぬ或の程を知 人
 白くく又小標の降るは終る 童
 布さるるん玉川乃妻 実

行形子書表しきる駕の日記 五
 かくく後のそりや海に火 舟
 此れをを洞しやてかくや姫 園
 佐波のたふといふまもさえ 童
 舟橋たつちく浪をおとこ 臺
 まりけりくるる井登のあ 凡
 五位の唱々部の月比はけり 舟
 下戸子化るうた定まへ息 実

辻堂平寝るも起るも旅衣
 松葉すくやに光敷貝から
 なまかの情をむねのあきお
 もろくを風にとりて
 道なきをむかひし峯村花
 のくくとあむ古閑

人 園 童 磨 凡 床

四海皆旅の客さよ雉子の聲 逸人
 のきくことさへ角くそ 秋臺
 一葉をたひし金法おめて 秋磨
 走る嵐を取道し 人
 月ほのく空を傳ふ 厩寮 臺
 つもり 名初 秋風 吹 磨

片里乃流り病ハ盆の頃 人
多乃在傍正れよふ人となり 磨
雨て洗——岩根松根 人
銀流火のふちあふちええ 臺
うゝ火もいゝつゝいゝ火 磨
月の秋砧此音乃乱打 人
三十石乃舟のあゝ寒々 臺

一花を鬼灯葉ふいせあり 磨
気違ひの名を呼次鬼 人
楓となすのふはるき 臺
日もさるゝあゝ。ふの合奏 磨
春は水や心津の宰相 人
あはれ浦はうゝちうゝ 臺
ちハ破神のあはれをあらわん 磨
鶴の股毛ハ雪乃吹込 人

如く曰ふ悟開しとて米人
 才十人みちをわたりて
 何くそ都らじのわたりて
 ありてふの事なり奈良坂の鹿人
 なるれ如く花の如くや
 うまゝ又ハハニふらん
 吉至

大和文化萬年十年歲在
癸酉春正月日

思永堂逸人



書肆昭華堂



山水

石

石

明

石

石

石

石



石塚
石塚
石塚

石